

9世紀後葉：SI-008・020（北部）・027・031（中央部）

10世紀前葉：SI-024（北部）

これによると、台地上の集落は削平等により様相が不明であり、出土遺物が少なく時期不明の住居跡もあるが、斜面部については、8世紀前葉（SI-014）と10世紀前葉（SI-024）の各1軒を除いて、北部では7世紀後葉～10世紀前葉まで、中央部では9世紀前葉～後葉、南部では8世紀後葉～9世紀中葉に、いずれの地区も各時期で2～3軒ずつの小集落として存続したことが想像できる。なお、8世紀末～9世紀初頭とみられるSI-018・019は、古代集落変遷図（第42図）では時期の均等区分上、8世紀後葉に含めている。基本的に1世紀を3期に区分したが、前後の時期にまたがる可能性のものを無理に該当させているので、当時の実態には合わないであろうが、集落変遷の傾向としては明らかとなったと考えられる。

中世以降については、遺物の時期は15世紀後半～19世紀後半までほとんど途切れることなく連続する²⁾。全体的傾向としては、中世遺物は極めて少ないが、15世紀後半の内耳土鍋（SX-013）、16世紀代の土製擂鉢（SK-013）、16世紀中葉の瀬戸・美濃産擂鉢（SK-008付近）、16世紀後半のカワラケ（SX-010）がある。近世については、土器は17世紀代主体のカワラケや内耳土器、磁器は18世紀前半の肥前産、陶器は18世紀後半の瀬戸・美濃産が主体で、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器は微量であり、全体では18世紀代が主体である。性格不明の土坑や溝が多く検出されたが、中世の遺構と断定できるものではなく、ほとんどが江戸時代以降から現代にかけて、住居建設や農作業などに伴って掘り込まれたものと思われる。台地上は平安時代後期～中世前期までの痕跡がなく、15世紀以降徐々に開発され、江戸時代後期以降には物井集落の一部として現代まで継続されたことが想像される。

第2節 灰釉淨瓶および上総型土師器杯について

住居跡からの出土遺物は、土師器・須恵器・土製支脚・鉄製刀子・紡錘車といった通有の遺物にほぼ限られるが、SI-014で灰釉淨瓶（第18図8）と上総型土師器杯（第118図7）の破片が出土している点は注目される。

淨瓶は僧侶の持物とされ、県内での類例を見ても、上総・下総両国分寺や山武市真行寺廃寺跡などの寺院跡で出土している。このほか、「草薙於寺坏」の墨書土器が出土した市原市草刈遺跡K区、「寺塔」「寺」「佛」墨書の同市萩ノ原遺跡、「大寺」「佛」墨書の八千代市白幡前遺跡、「寺」「仏」「法」の大網白里市砂田中台遺跡など、寺の存在をうかがわせる墨書土器や鉄鉢形土器等仏教関係遺物や仏堂とみられる掘立柱建物跡が検出された遺跡で出土している。

SI-014で出土した淨瓶は、頸部のみの破片であり、出土状況から、破損後に廃棄され混入したものとみられる。この淨瓶が本来集落内のどこで使用されていたか不明であるが、他遺跡の事例からみて、本遺跡にも掘立柱建物の仏堂、いわゆる村落内寺院が存在した可能性は高く、仏事に用いられていたと推測される。今回の調査では掘立柱建物跡2棟が検出されたが、半分以上失われて全容が不明である。柱の配置は整然としておらず、廂の存在も不明で、仏堂の跡とは認められない。ほかに仏教関係の遺物は出土していないものの、集落内のどこかに掘立柱建物の仏堂があった可能性は十分考えられる。

上総型杯は、口縁部から底部のごく一部が遺存するのみであるが、内面に上総型杯の特徴である斜格子暗文が認められる。また、体部外面には上総型杯に通有な、口縁部ヨコナデ後の横方向のヘラケズリ調整が施されている。上総型杯は底部にやや丸みを残した平底を呈するという特徴を有するが、おそらくこれ

も同様の形状であるものと考えられる。

7世紀末から8世紀初頭にかけて、畿内の律令的土器様式の影響を受けて、東国各地で新型式の杯が出現するが、当該期の房総半島では上総型杯がこれに該当する。上総型杯の特徴の一つである斜格子暗文は、畿内産土師器の影響下に成立したとされているものの、畿内産土師器の暗文には斜格子は皆無であり、その系譜の原点は解明されておらず、上総型杯が有するであろう特殊な性格についても不明な点が多い³⁾。

斜格子暗文杯の分布状況は、ほとんどが房総半島に集中しており、他県の出土例はごく僅かで、旧上総国北部に集中している。千葉県内約80遺跡の出土例のうち、安房国が1遺跡、下総国では7遺跡で、その他は上総国からの出土である。下総国における分布は、7遺跡中4遺跡が上総国との国境沿いに集中している⁴⁾。共伴遺物として畿内産土師器が多数出土する例や、国替えの儀式が執り行われたのではないかと考察されている遺跡からの出土が特筆される。本遺跡の場合も先述の淨瓶がある。

SI-014の時期は8世紀前葉であり、本遺跡で検出された該期の住居跡はこの1軒のみである。その後、周囲の北部斜面部では10世紀前葉にかけて存続し、中央部斜面や南部斜面では主に9世紀代に集落が展開する。つまり、灰釉淨瓶と上総型土師器斜格子暗文杯が出土したSI-014が本遺跡の奈良・平安時代の集落では草分け的な住居であることが想像でき、これらの遺物が有する畿内や僧侶との関係と併せて注目されるものであろう。

注1 糸川道行 2006「第7章まとめ」『四街道市小屋ノ内遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV－』

(財)千葉県教育振興財団ほかを参考とした。

2 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ 発表要旨資料集』江戸陶磁土器研究グループ／水本和美 1998「陶磁器・土器分類・計測基準」『伝中・上富士前Ⅱ』豊島区遺跡調査会／野上建紀 2000「(肥前)磁器の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会などを参考とした。

3 佐久間豊 1993「斜格子暗文を有する土師器杯について」『史館』15 史館同人

4 大岩桂子 2012「房総における斜格子暗文杯の分布－斜格子暗文杯の特殊性について－」『研究連絡誌』第73号(財)千葉県教育振興財団／同 2013「上総型斜格子暗文杯の再検討」『考古学の諸相Ⅲ 坂詰秀一先生喜寿記念論文集』立正大学考古学会